

## 職人町の墓

### —左京八条二坊十四町の調査から—

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 等間隔で並ぶ小型木棺墓(南東から)

**調査地の概要** JR京都駅およびその周辺は平安京左京八条三坊に位置しています。平安時代後期、その東半分に「八条院御所」があったとされていますが、鎌倉時代には「八条院町」と呼ばれる職人の町になりました。京都駅再開発にともなう数次にわたる発掘調査では、銚造関係の遺構・遺物が数多く出土し、職人の町はさらに西の八条二坊へ発展していったことが明らかになってきました。

**1997年の調査** 左京八条二坊十四町内では、発掘調査が進展するにつれて、調査区内のあちこちから人骨が姿をあらわし始め、室

町時代前期の墓地の一面が出現しました。墓の多くは、長方形の掘形の中に木棺を埋葬したものでした。検出したのは、木棺墓22基と土壇墓2基で、木棺墓はいずれ

も南北・東西の方向に整然と並んでいました(図1左)。

墓は棺の長さから大・小の2つに分けられます。小型の墓は5基ありました。墓6は棺の長さが

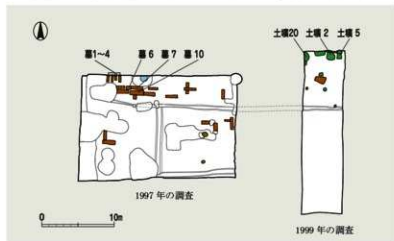


図1 墓の配置



写真2 墓10の人骨(東から)



写真3 土壙5の犬骨(南西から)

0.45 mと最も小さく、人骨は残っていませんでしたが、乳歯とみられる前歯が数本見つかったことから、被葬者は2才未満の乳幼児であることがわかりました。また、ほぼ等間隔で並ぶ墓1～4(写真1)は、いずれも蓋板・両側板・底板が残っていたことから、棺の長さが0.90～0.95 m、幅は0.20～0.25 mの小型で、子供が埋葬されていたと考えられます。

大型の墓は17基ありましたが、墓内に人骨のほぼ全身が残っていたのは、墓7・10の2基でした。墓7は長さ1.7 m・幅0.5 mの掘形で、木棺は残存していませんでしたが、人骨は頭を東にして上半身が仰向けで、下半身は北に膝を折り曲げた状態で埋葬されていました。被葬者は身長155～160 cmの20～40才の成人男性であることがわかりました。

墓10(写真2)は掘形が長さ2.0

m・幅0.7 m、棺の長さが1.8 mで被葬者は身長が165 cm前後の成人男性でしたが、病変により重度の骨髄炎を起こし全身の骨が肥大化していました。埋葬状態は仰向けで、下半身は左右の膝の位置で縛ってありました。上半身の中央には、直径が約10 cmの環頭をもつ、全長57 cmの杖状木製品が置かれていました。また、同じ年に実施された北隣りの調査でも、木棺墓5基が検出されています。

**1999年の調査** 東隣りの調査では、木棺墓3基他に犬の遺体が入れられた土壙10基が見つかりました(図1右)。中から犬骨が20体以上も出土しました。土壙の形状は方形と円形の2つに分かれます。方形の土壙2・5(写真3)からは投棄された状態で、数体の犬骨が折り重なって出土しました。また、他の土壙には鉄釘が残っているものもあり、木製の容器に入

られていた可能性があります。

円形の土壙20は2体の犬の全身骨と土師器皿が10枚以上出土しています。鉄釘も残っていたことから、木製の容器に納められて手厚く埋葬され、土師器皿を供えて何らかの儀式が行なわれた様子がうかがえます。

**まとめ** 墓地の範囲を推定すると、南北約30 m・東西約20 mの規模となり、十四町内の中央部より北寄りにあたります。

墓地の北では、八条坊門小路に面して、銭・鏡・刀装具などの青銅製品の鋳造工房群が連なって検出されています。墓地の被葬者が工房に従事していた工人やその家族だと想定することができます。

今回、人骨と犬骨が隣り合った調査区から出土したことで、中世の集団墓地の一面に犬の遺体を葬る場も確保されていたこともわかりました。(加納 敬二)